



男女の違い～私らしさってなんだろう～

入善町立入善西中学校 二年 金森 美咲

「男女の違い」とは何だろうか。髪が短く、ズボンをはいていたら男子。髪が長く、スカートをはいていたら女子。私は一人の女子としてこの考え方を否定したい。

私が小学生になる頃、大阪府吹田市から富山県入善町へと引っ越した。以前にも引っ越しがあったため、慣れていたものの緊張と新しい友達ができることの楽しみでいっぱいだった。低学年の時は、みんなが話しかけてくれたり、男女関係なく遊んだりしていた。それは、私にとって楽しくて、「ずっとこの時間が続けばいいな」と思っていた。

高学年になるにつれ、みんなの様子が変わってきた。周りの女子は、おしゃれな私服を着てきたり、髪形を今どきにしたりなど容姿の変化が起きていた。休憩の時間もみんながスポーツをするのではなく、校内で流行りのグループの話や恋愛の話をしていた。それに比べて、私は小さいころから変えてない短い髪と動きやすいズボンとTシャツで学校に来ていた。休憩時には男子たちとスポーツをしていた。私は、元々スカートが嫌いで、流行りなど全く興味がなかったのだ。その様子を見ていた女子たちは、みんな口をそろえて笑いながらこう言った。

「あの子いつも男子といるよね。ついでに格好も女子っぽくないし、もう女子じゃないじゃん。」

私は、とてつもないショックを受けた。これを私が聞こえるところで言われた怒りもこみ上げてきた。まるで、自分の存在を否定されたような悲しみと苦しみがずっとずっと残った。その日から言葉のとげは増え、鋭いものとなった。そして、私の心をぼろぼろにした。家に帰ってもその言葉一つ一つのとげが取れることはなかった。「自分が自分らしくいてはだめなんだ。みんなに合わせないと」もうこの思いしかなかった。

そう思うようになってから、流行りの話をしてみたり、服装も少しずつ意識するようになった。話に入ろうとしても、やはり分からないことばかりだった。だから、たくさん知ろうと頑張った。その結果、少しずつとげが減った。だけど、全然楽しくなかった。それでも、もうあんなこと言われなくなかった。必死に笑って、みんなが思う女子でいられるように、存在が認められるように努力した。その裏では、涙が止まらなかった。悔しくてたまらなかった。そんな中、私を変えた出来事が起きた。

六年生の時に表紙の美しさに惹かれた本がある。それが『十一月のマーブル』だ。内容は、自分の家族の真実に立ち向かう主人公の姿を書いた物語。児童書にしては重い内容だが心にくる作品だった。私を変えたのは、主人公とその親友レンの場面だった。レンは、体は女子だ。しかし、心は男子だ。だから、周りからは女子として扱われ、トイレだって女子トイレに行かなければならない。それはレンにとって地獄であり、苦痛だ

ろう。たくさん悩んだだろう。それでも、自分は男子だと言い切って、最終的には自分を好きになろうとしている。そんなレンを見て私は衝撃を受けた。周りを気にせず前を向いて自分であることが羨ましかった。それと同時に尊敬した。読み終わったとき、自分は弱く情けないと思った。周りから女子ではないと言われてから、自分の存在を消そうとしたのは自分だ。このことに気付いてから、私はレンのように自分を大切に、私らしくいることにした。以前のように、服は動きやすい服にして、男子たちとスポーツをした。とても楽しかった。しかし、周りの女子は、また私の前で「女子じゃない」と言ってきた。私は、こう言った。「そうかもね。私は、スカートは嫌いだし流行りとか全然知らない。でも、それが私だから。私でいられることが一番嬉しいんだ。」

それから、女子たちは私に何も言わなくなっていた。

中学校からは、制服が原則となる。女子は制服がズボンかスカートを選べる。私は、母に「どっちがいい。」と聞かれたとき、思い出したくなかった記憶を思い出してしまった。いや、変わったんだ。そう思いながら言った。

「私、ズボンがいい。」

言い切れた時、なぜか心が軽くて嬉しかった。学校では、姉からもらったスカートとズボンを気温や授業に合わせてはいている。女子でズボンをはいているのは学年で私だけだ。なんと誇らしいのだろう。

今はまだ男女の概念が離れない人が多い。しかし、私はこの概念を覆したい。もし、その概念が残っている人がいたら、私は、一人の女子として胸を張って言うだろう。

「男女の違いなんてない。自分が思う自分が本当の自分だから。」

と。